



第9回全道展の会場風景



道美術界と全道展

……その果たすべき役割について……

全道展が歩いて来た十年間は、北海道美術界にとつても、その著しい飛躍ぶりに於いて記憶さるべき十年間であつた。⁴北海道の美術文化の水準を高め、これの普及に貢献すること⁴を謳つた全道展創立の目的は、この十年で一応果されたものといえるだろう。

だが十才に達した全道展は、いま決して誕生当時と同じことばかりを考えているわけには行かない。周囲にも十年の時の流れはあつた。全道展は、過去の倚い実績を踏み台として、休む間もなく新しい目的に向わなければならない。道美術界が全道展に望んでいるのは、そんなにはげしい重労働なのである。

推進と普及の原動力としての全道展は、まことにめざましいものがあつた。この場合に、全道展が有形無形に、中央の色彩をかなり深く持ちこんだことは、その働きを一そうとユニークにしたものだと思う。私は毎年、会員たちが中央展に発表した力作を、全道展でみるのを楽しみにし、また出品者たちが、一日も早く中央に進出するのを待つた。この言葉はずい分と問題をふりまきそうな危険を含んでいるが、事実全道展で育つた作家が、中央展に入選し、受賞し、会友となつて行く姿をみるのは、私にとっては大きな喜びであつた。「みんな一人前になると東京に行く、道自体の絵は何も進まない」と不満を唱える人もいたが、私はそうは思わない。彼れにとり残された地域の文化は発達しなくても、そのことによつて日本の文化が前進する。地方文化という言葉は、使い方によつては、かえつて文化を退行させる性質を持つている。

十年間で、最もすぐれた成果の一つは、第四回展以来、毎年各地で開いて来た地方展である。苫小牧、小樽、美唄、倶知安、函館、室蘭、釧路などへの巡回は、それぞれ大きな刺激となり、巡回した土地からの翌年の出品は、數に於ても、質に於てもおどろくような向上をみせていた。これは何よりも雄弁にその成果を物語るものであり、こんごもぜひたいに継続すべきことを全道展に義務づけたものともいえるだろう。

こんどの全道展に期待するのは、一美術団体としてではなく、あくまで社会と密着した一文化団体としての自覚と行動である。絵描きが絵だけを描いて他の一切にはかまわぬという時代は過ぎ去つた。たとえば、美術館建設運動にも、生活改善運動にも、あるいは選挙運動にも、全道展は、一つの指導的存在として、雄々しく先頭に立たなければならないだろう。つぎの十年間は、この意識の硬さが、大きくものをいいそうな気がするのである。(T)



札幌展 6月18日—29日

6月18日 出品者懇親会—衛生会館

6月19日 美術映画と講演の夕—道新—ニュース劇場

6月20日 記念パーティー産業会館

北海道新聞文化賞受賞作家（上野山清貢・田辺三重松両氏）

特 陳

10周年記念画集の発行

会員揮毫色紙即売会

記念手拭の発売

旭川展 7月6—11日

北見展 7月14・15・16日

室蘭展 7月1・2・3日

美唄展

函館展

伊藤 信夫



アトリエにて



裸 樹



私 語

私は何時も作画に一定の態度をとらない。

自然対照を出来得る丈け楽な気持ちで受け入れ、表現もその都度に考えることにし、前作にこだわることも無く一作毎に白紙で表現する様にしている。それ故に私の作品には一連の傾向を示していないと思うが、私はそれが自分の姿であると考えて居るので不安を感じていない。ルーベンスや、グレコ、レンブラントを好きであると同時にセザンヌ、ピカソ、ルオー、マチス、ボナールも好きであるし、零舟、宗達、光琳、鉄齋も大好きである。

私は自然の中にその時その折りに、色々な角度から美を感じるのである。私は浮気者かも知れないし、信念のない男かも知れない。だがそれは私は肉体年令よりも若いのだと思つている。兎も角も私は描き度くつてたまらないのである。又どうしてこんなにも下手なのかとウンザリして居る。それ故に私はまだ生長することが出来、未来があることを信じて努力しているのである。



遠 景

読書に眼鏡が要る年齢になつて、時々、いつとはなしに遠景に興味を引かれて描いて居ることに気がつく。風景画を描く人達の年齢とその作品についてあれこれ考え合わせてみると、この様な傾向が多少はあるのではないかと思われる節もある。今度出品した四十号も、花盛りのりんご園の中であちこちと描く箇所を捜し歩いている中、ふと枝の間から遠い残雪の山の見える場所に行き当って描いてみる気になつたのだが、田舎暮らしをして早や十年、全道展も今度で十回目、僕も何時の間にかそれだけ年を重ねてしまつたのだから、遠くのものに眼の焦点が合うようになったのも無理からぬというわけであろうか。





ユーカラ (笛)

昔、金田一博士の岩波文庫版、ユーカラを読んで感動したことがあり、一度物語詩をタブローにしてみたく思っていました。

実際にコンポジションを考えて見て、これは難しいと思つたのですが、絵画の世界に限定された構成と云う面白さで描く楽しみは味合えたのですが、詩の持つ本質と絵の特質との間にあるもどかしさを自覚させられました。しかし私はこれから何とかして私の世界の中に持味として強力な性格を生かして行つてみたいと、過去、現在、未来、にまたがり理想を持つて居ります。

絵の本質はどこまで行つても未知ではあるけれども、止み難いあこがれであります……。





駒ヶ岳の秋

駒ヶ岳と云う山は、各地にあるが、この渡島半島の山は、駒ヶ岳中で、最も低い山ではなかろうか、しかし海にちかくヌツと突立っているせいか、標高よりははずつと高く見える。この山を噴火湾の森の方、つまり北西から眺めたかたちが、自分は一番好きである。夏も美しいが、秋が深くなるに従つて、山髪が次第に深く、濃く、ハツキリして来て、一層美しくなる。

秋には、麓を流れる、白川のほとりで、何度も駒ヶ岳を描いた。

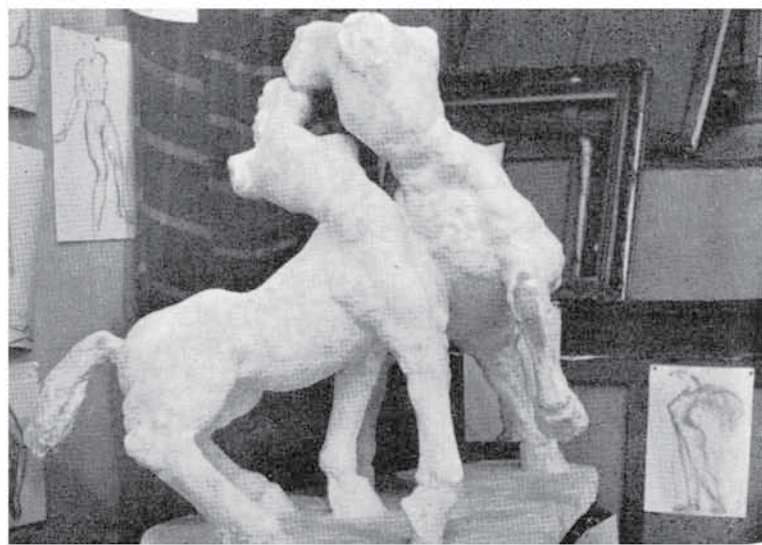
麓をめぐる、錦繡、登りにあえく汽車の音、白い噴煙、穏かな快晴の日中は、眠い程暖い。時には風が冷たく、雲は疾く、時雨がやつて来、山は刻々変貌する、しかし村落は収穫を終えて落付いている。

去年の十五号颱風では、大沼から森の間の駒ヶ岳の麓が、颱風の通路だつたと見えて、唐松、唐檜の美林が雑倒され、果樹が傷み、今年の春は、花のつけない樹もある。近年打続く凶作のせいもあり、この風景も瘦せた。

本年も今の処、気候不順である。今後はどうか順調な天候に恵まれて、豊かな農村の姿を現出してくれるようにと、念ずる次第である。



駒ヶ岳快晴



橋本三郎



馬





西村喜久子

旅

今年の様に気候が悪いと快晴に恵まれた写生旅行を思出す。残念乍ら樺太は行かず終いだつたが、本洲は東北関東関西九州伊豆房洲遠くは満洲の満洲里迄随分歩いたものだ。ハルビンの夏から秋にかけての空気の素晴らしさ、白糸露人の若い娘とスガソー、異国情緒にやるせなく迫るバラライカの響き、胡弓の音のもれる城内から小さい足してエメロードの服着た中年の女の奉天、又は瀬戸内海を渡つて別府に上り、雄大な阿蘇山麓を画きつつ長崎に入り雲仙ゴルフ場の霧に見え隠れする真紅のつつじ、あのホテルの庭で飲んだ牛乳の甘さ、北海道とは又違う風景の数々、房洲の尖端白浜の燈台や夕に帰る海女の肌の色等季節が来ると七ツ道具をかついでさまよい出たくなるのである。





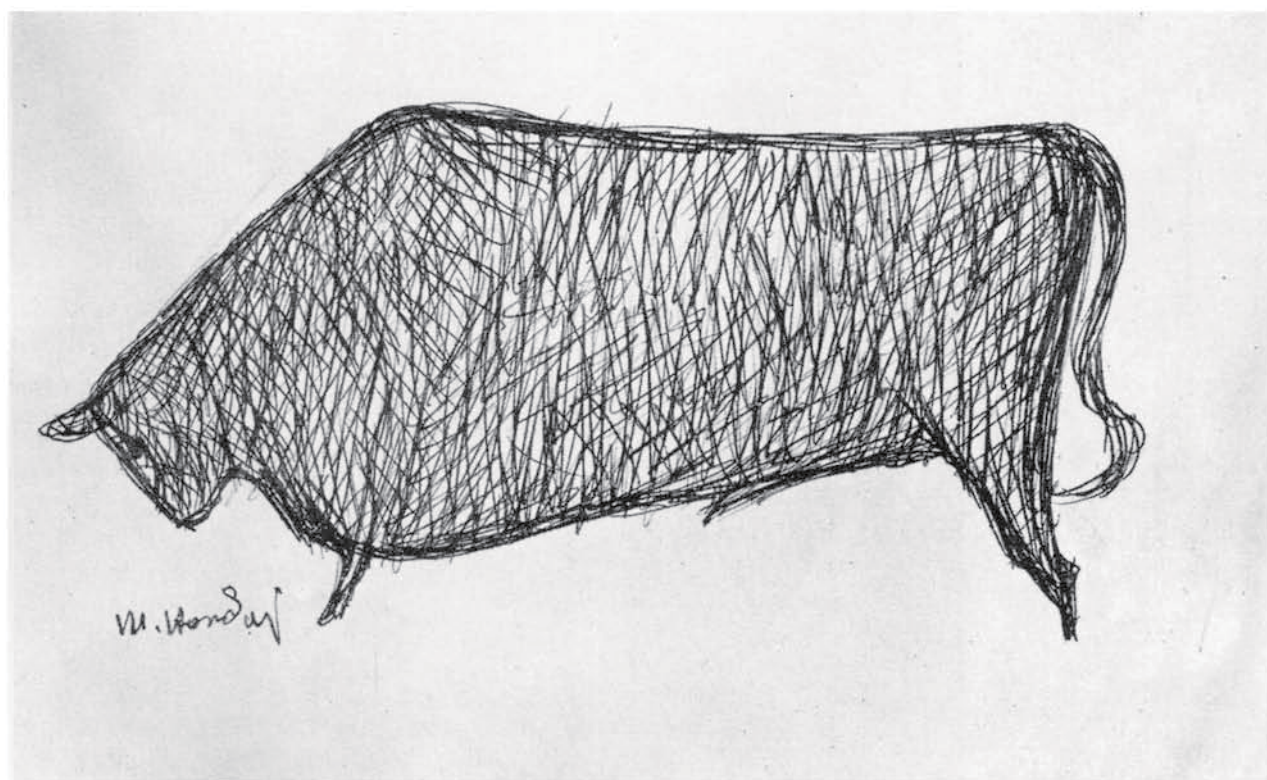
サーカス（モスクーにて）



一度札幌で彫刻の個展をやらないかと、知人や先輩からすすめられ、自分も、来年は来年はと思ひながら、今年も又出来そうもない。東京にいてさえ、まだ彫刻だけの個展というものに、本式にとつ組んでいないので、なかなかおつくりなのである。一昨年、十五年振りて札幌に行つた。それもたつた一週間だつたので、郷里に帰つたという感じがしていない。いつか、ゆつくり、郷里へ歸つて、子供の頃遊んだところなど行つてみたいがいつはたせることやら。全道展の十週年だと聞き、ぜひ出てこいといわれているが、六月十三・四日にならないと確かなことがいえないので残念である。東京は忙しすぎる。



牛は岩山のように 大地にどつしりと脚をふんまえる。
牛はのろのろと歩く。
牛は決してあわてない。
牛は一步一步間違いなく土をふみしめる。
牛はのろのろと歩く。
牛は自分の思つた方向へのろのろと歩く。



小川原 脩

若い頃からの仕事を振り返ってみると、花とか静物とか風景とか云うものを私はそんなに数多くは描いていない。私には私風の好みがあつて動物とか、人間とかが好きだ。人間や馬や牛や熊やにわとりを描いていると、とても楽しい。縋べて烈しく動くものが私のモチーフを形作つていようだ。それらのモチーフを組み合わせたり、かつとうさせたり、或は要約したりしながら私は私自身の仕事を継続して来た。

ところで之れが何故であるのか私には判らないのだが私の制作の動機はズツと底の方で、一つの扁向が私を支配している。之れが私をロマネスクにしているようだ。



北方の男





釧路は目抜き幣舞橋の下。実際に見える通りでなく黒や白を強調して使ってみた。その結果は画面の隅々にまで及び、形の組合せにも最後まで決定がつかなくなったり空の色もあんなになつてしまつた。空は変化をつけたくなかつたが遂に雲らしきものが入つてしまつたので、初めの構想からはほど遠いものになつてしまつた。これは私の敗けのようである。

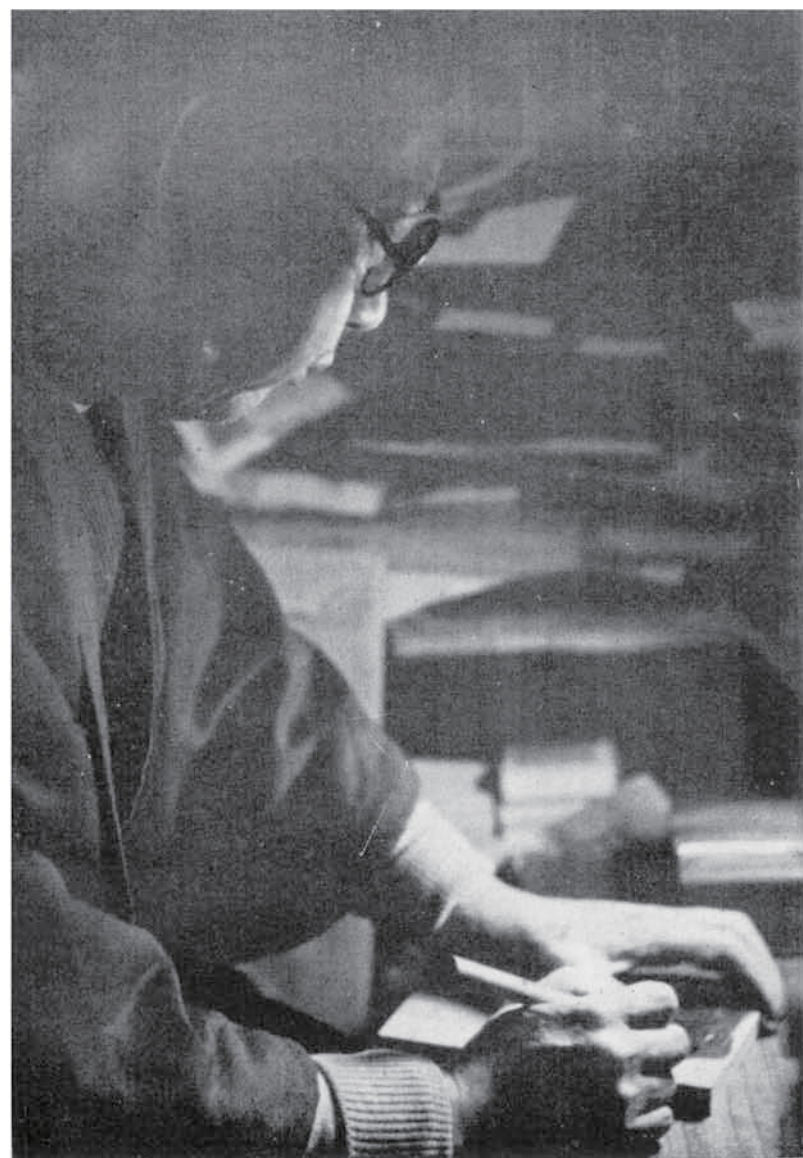


大谷久子

作品 A



アトリエアヒルの内をビイビイビイと家鴨のひよこが走り廻っている。無力で可愛いらしい小さい彼と彼女は（鳥屋で鑑定してもらったのだがあまり当てにはならない）私の掌の上で首をのぼし餌をねだっている、私の掌が少し動くともう生きていられない事を知っているのだろうか、人気の無いアトリエが肌寒さを感じさせる。此の無力で小さい魅力有るもの、外で黒いムク犬が女主人の寵を奇妙なものにうばわれた窓になつて



この写真は昨年朝日新聞の英文日本の齊藤寅郎氏がとつてくれたもの。英文日本の二号に明治年代の横浜の絵をたのまれた時にとつてくれた写真です。この写真は顔の部分が英文日本の二号にのつて居ります。

私はアトリエなどというものはなく、机のある所が仕事場です。刷る時は又別の場所に移動したりします。

(葉書の一節)





ここ二三年というもの、一身上の不都合続きで、身心共に傷めつけられてしまった。仕事の万もすつかりお留守になつた形。まことに不甲斐なく申訳ない次第である。本年も亦不勉強の結果をさらさねばならぬという仕儀。仕事らしい仕事は出来なかつたが、描くことは好きだからデッサンは欠かさない。特に趣味的ではあるが、顔がおもしろいので、人を掴まえてはその顔を描く。顔のフォルムも人によつて皆特色を持っているので、一つの顔を把握消化することは容易ではない。だから自分の氣に合うものは中々出来ない。





然 別 湖

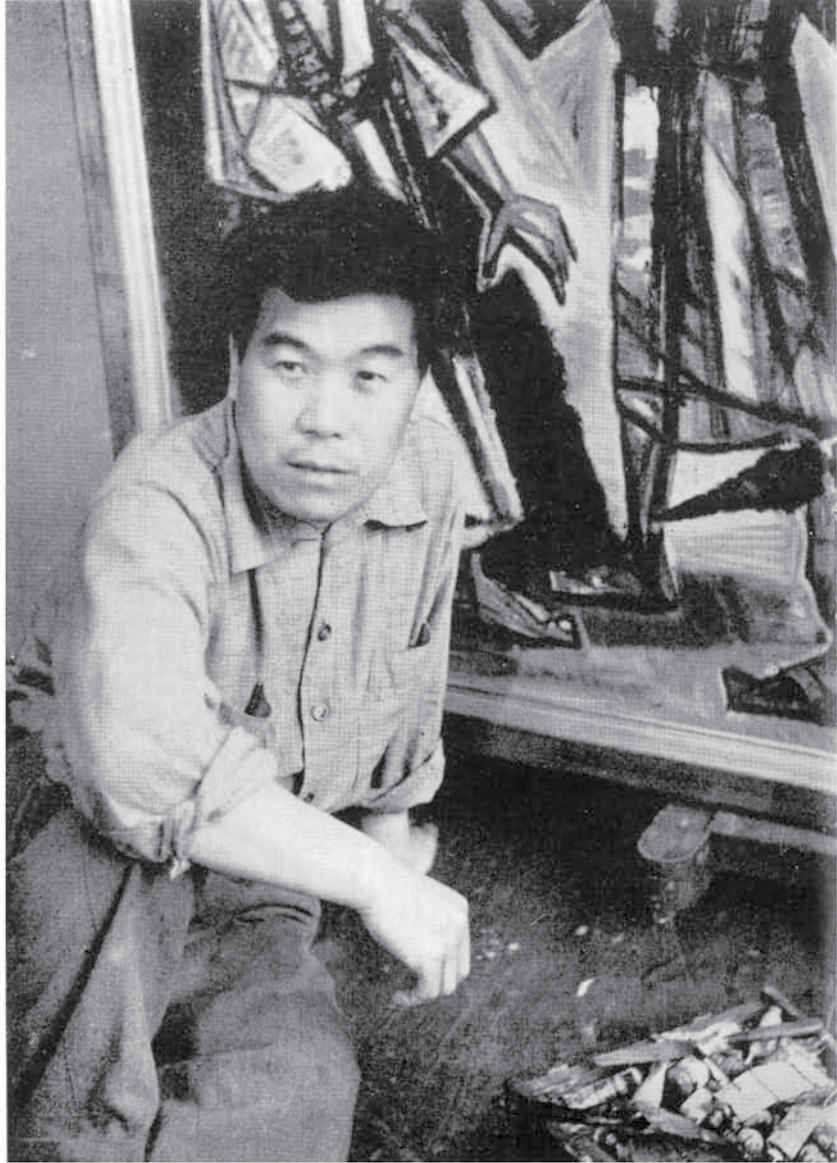
友人の話

銀座のMデパートで或大家の個展を見ての帰り友人はこんな事を言つた。

「画家というものは年をとると下手になるものかな、一体大抵の画家は30代から40代にかかる頃相当いい所を出すらしいからその年頃で死んだ奴は得だネ、天才として残るよ、だから岸田にしろ、前田にしろ、佐伯にしろ、中村つねにしろ今迄生きてくれたとしてどんなものかね、案外変な事になつてやしないかな、そうして見りや当代の梅原も安井も先づ偉いものだ、今の3、40代と一騎打が出来るからナ、といつたつて必ずしも昔よりうまいと計りは行かぬよ、だから絵かきは長生きした奴でいい仕事をしたかを考へる事さ、若い仕事だけでその人間を天才にしない事だよナ、君ノ」



田中忠雄



ブルコダの夜



ニワトリ



展覧会制作が終つてからかこう
と思つて、庭先に植えた三色菫
も春たけて日増に小さくなつて
しまうのは気にかかる事だつた。
やつと展覧会から解放されて、
この日この花をモチーフとして
小品をたんのうする事が出来た。

高橋北修



まりも 囲む人

谷 口 一 芳

あたりまえのこと

年から年中神経の消耗の連続は
何人も肯定するだろう。

しかし、神経の消耗は精神で補
える。

努力はするべきであるが、焦つ
たり、背伸びしたり、無理するこ
とはない。

パーソナリティを持つこと以外
にない。

人間以上のものは生れないのだ
から。



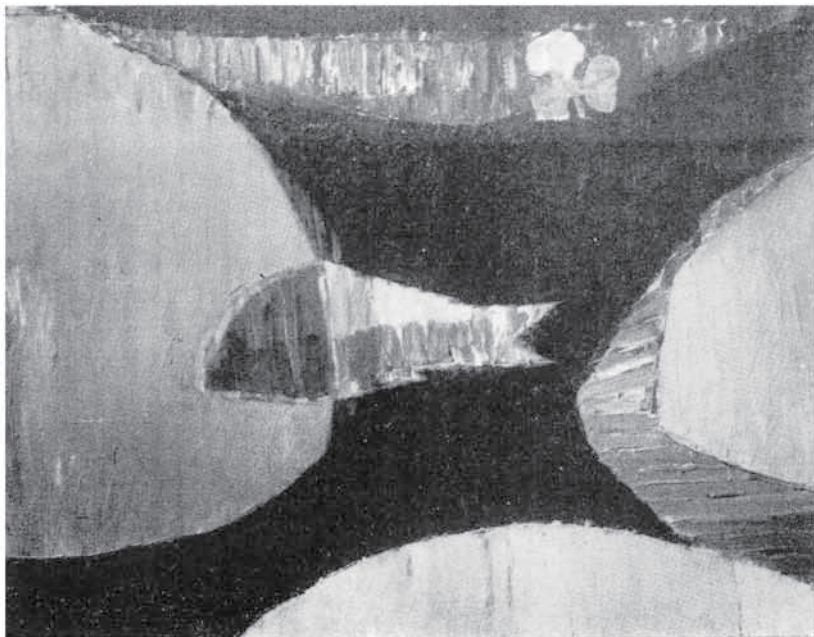


舌 代

旧作は手許にない。丸焼けであつた。

是等肖像、広田弘毅、鳩山一郎共に著名人のばかりで、恐縮だが、大切に蔵品として保存して下さつたものが残つたわけ。自画像は（大正十四年作）いはば、自画像のハシリで、昔官展へ出品した『パラダイス』頃の思出の一品。鳩山のは菅羽邸の地下室に、広田のは大崎の星製菓の地下室に、共に、その心づくしを感銘している。六号のは小さいので防空壕に入れてあつたので、残つた一ツである。

写真は画室の一隅から僕専用の二階への上り口でとつたもので、なかなか立派上等である。



眼のない魚（B）

不用意にも超現実主義や抽象主義
絵画その他の前衛絵画を総称してこ
の国ではモダンアートと呼んでい
る。

最近のモダンアートに対する不信
は必ずしも写真的絵画の信頼を意味
するものではない。

写実主義絵画の伝統を持たないこ
の国の人たちの中で写実絵画が口喧
しく叫ばれるのはどうしたことであ
らう。

描写絵画と写実絵画との間に明確
な線も引き得ないこの国の画壇で広
範囲なモダンアートを総称的批判す
ることは甚しき下瀝である。

絵画することは謂る写実絵画であ
ることや謂るモダンアートであるこ
とではない。





ありふれた言葉である。「芸術は美である」と、蓋し、至言である。美は愛であり、力であり、真実である。美は自然の中に、さまざまなかたちで存在する。そして、それを求める人の心で、すべての人々に、自然は限りなき、大らかな愛情をもつて美を与える。謙虚な心で、素直に、それ等の美を見出し度い。そしてより高い、豊かな、みづからのものにして行き度い。自分自身を、元気づけ、強く心をふるい立たせて呉れると同時に、人々の心の中にも、同じ様に何か真実を、ささやく事の出来る心あるものにし度いと、私は常にねがふのである。





母と子

I am sorry

終戦の年の冬は珍しい大雪だつた。二十年ぶりでむかへた故郷の冬にこの天与の大雪はまことに迷惑な贈物で、その上進駐軍の悪戯と恐怖がはなはだ寒々としたみじめな思いをさせるものである。

いつの日だつたか忘れたが夜更けの一条通をあ
の雪道特有のさびしい音を鳴して歩いていると
突然懐中電燈でバット顔を照らされペラペラとき
た。しまつたと寒さも消し飛んでしまつたが、空
腹な腹に力を入れて落付くと、僕よりも大きな奴
が三人近づいて来た。そして何やらごそごそやり
ながら石鹸と煙草を出したので少々安心したもの
の金の持合せもなく、腰に一本煙管を差している
だけの無防備態勢では何んともアイアムソーリー
な姿であつたらうと、十年たつた今でも我ながら
情なく思う。これは全道美術を作らうという相談
会の帰りの寸劇で、協会誕生の裏の涙ぐましき悲
話である。

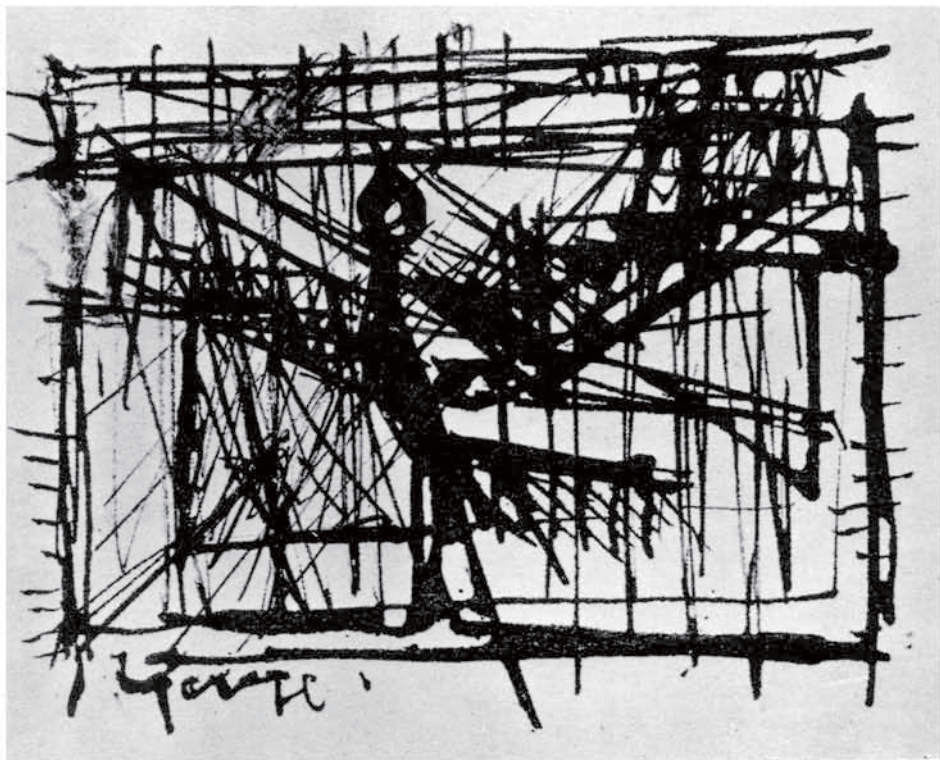


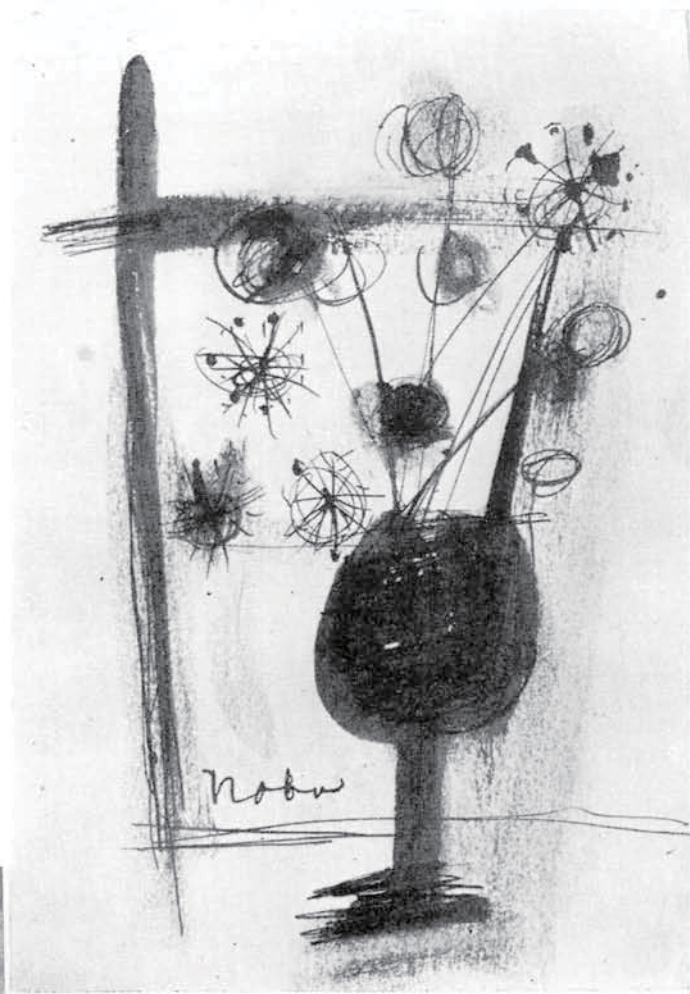


グウ感

僕は夢ではすぐやけに広々したただだつ広い処に出てしまう。出口も入口もヌケ穴さへないのに、それはアラビヤナイトのビンの口から飛び出す大入道の様なあんな調子でもなく、ただすつと出てしまう。

僕は昼間はその穴や出口をさがしている様だと云うよりは、ナマコかなにかの様に生きているということをもさぐっているのかも知れない。なまこの様にグウタラで、おまけに目さへ見えないみたいだ。とに角穴も出口もカイモク今の処わからない。まあビンのコルクもはづれまい。だけどとに角まさぐっているのだと思つている。





花

花ならどんな花も好きなので
す。

すみれ 矢車 スキトビイ
かすみ草 あざみ タンポポ
次々咲いて行く花、一つが散
るとチャーンと次のが待っていて
花は咲きつづけています。

私は朝などふとアトリエのコ
ップにかたまつて寄りそう様に
咲いている花を見て感動してし
まうのです。そんな時私には花
の一つ一つがせい一杯一生懸命
生きているのがわかるのです。

どんな花でも私にはきらひな
花というのは無い様な気がしま
す。



寸 感

全道展も十週年を迎える。感慨無量という言葉が、そのまま当はまる。誠に早いものである。その頃一番若いと自負していた私が、もう中老の位置にある。

時代が進む。時が流れる。

みんな真剣に生きている様だが、とても他人事など、かまっていられない。自分のことでせい一杯。この十年間の絵画の動きだけでも、観てみるがいい。

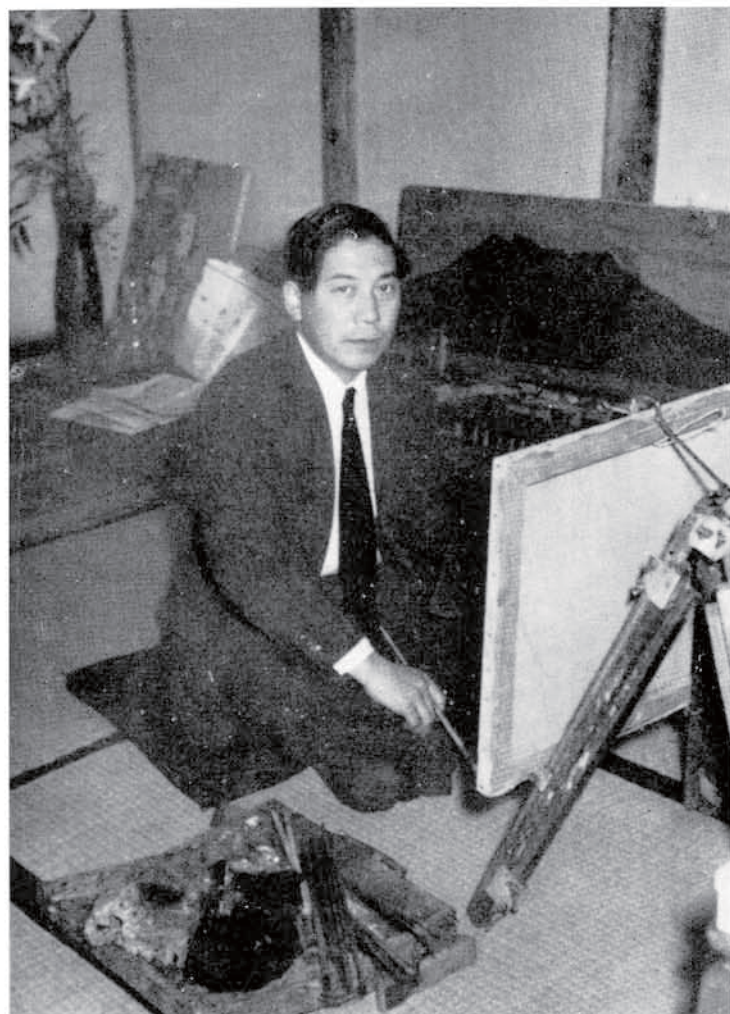
人間とは、自分以外のものは、皆、間違っていて、自分以外に真に、自分を解するものは無いなどと、真面目に考えて生きているものらしいから、愉しいぢやないか。

毎月、次から次にと、出版される本や、展覧会をみていると、いつの間にか自分も頭でつかちの福助みたいに、なっているのだが、鏡はみない事にしているんでね。

美しい文章とか、うまい言葉とかいうものは、音楽と同様に、人を陶醉させることが、出来るけれど、この頃どうも少し、そのことに疑問を持つて来たんだ。

それというも、書いた作者自身が、一番それに感動しているだけぢやないか等と、考えたりするんでね。

どうも芸術というものは、批評する立場からみるものではないらしく、鑑賞するというか、耽美するというのか、そんな立場に、作家が立つていないと、面白くないものらしいが、如何なものかね。 1955. 5. 25



松島 鈴子



恋人



門（新薬師寺）

ベルの音

札幌での想出に古い話だが余年前今井デパートで油絵と版画の個展を催した時の事、慇々終会日だと云うに一点の赤札もつかず遂に閉館のベルが腸にしみ込む様に鳴つた「万事休止」こりや額縁代や旅費をどうしたものかと思案しながら作品を荷造りしあと一個で終わろうとしている処へ駈つけた御仁が、遅くなつたかと云われるので荷を解き並べた処あれこれと意外にも数点の売約をされたのには全く驚いて了つたのである。

翌日車窓で聞く発車のベルは心地よい音だつた事は申すまでもないことであつた。



牧歌譜

牧場の牛を何年か続けて素描したことを想い出して、古いスケッチ帳を見て郷愁をかたむけながらの画室での製作です。

逆透視法をこころみて空間処理を考え、北海道の広い牧場をリリシカルに唄ひたかつたのですが……。



牧歌譜 (A)

ひととき

青葉、若葉の時も過ぎて深い緑の光が画室の中まで広がっている。年頭から描き初めた製作が初夏が来ても出来そうにもなく夏も描いて秋が来て、秋の展覧会搬入一パイまでかかることと思いながら製作を続けている。

仕事の息ぬきに庭の除草とばらの害虫取りをすらすらの合間に、よく動く「蟻」たちの姿に注目させられる、寧日よく動いている。住居の穴を掘るもの「サ」をさがし求めるもの、みなよく動いている。ラジオが夏場所相撲の実況放送を知らせている。練習に練習を重ねた今日の一番に、全精力を集注した気合の程が、アナウンサーの言葉にも感じられて、職業力士の苦闘の努力の姿が見えるようだ。努力の結集の結果がどうあろうと額面通りに次回の場所への期待をかけ続ける職業力士のあり方も、画家の発表の場のあり方と同じように思える。

草相撲力士でない角力取りのように私は、春、夏、秋、冬製作を続けるであろう。

手塩にかけて開花してくれたばらフアッションのあまい香りが庭一パイに流れていた。



桐の木、花、実と描くようになってから十数年、何かやわらかい感じを好む自分の性と合うようです。やわらかい感じの中にもう少しガッチリしたものを見出さなければいけないと想いながら……桐は私の母の名でもある。

桐の咲く季節がなつかしい。



桐の咲く教会

私の画室は茶の間であり寝室でもあります。

この部屋だけが明るいので家族と共に生活と画とともに起臥しています。

ある時は壁にキャンバスを掛け、ある時は寝具の上に画架を立て。

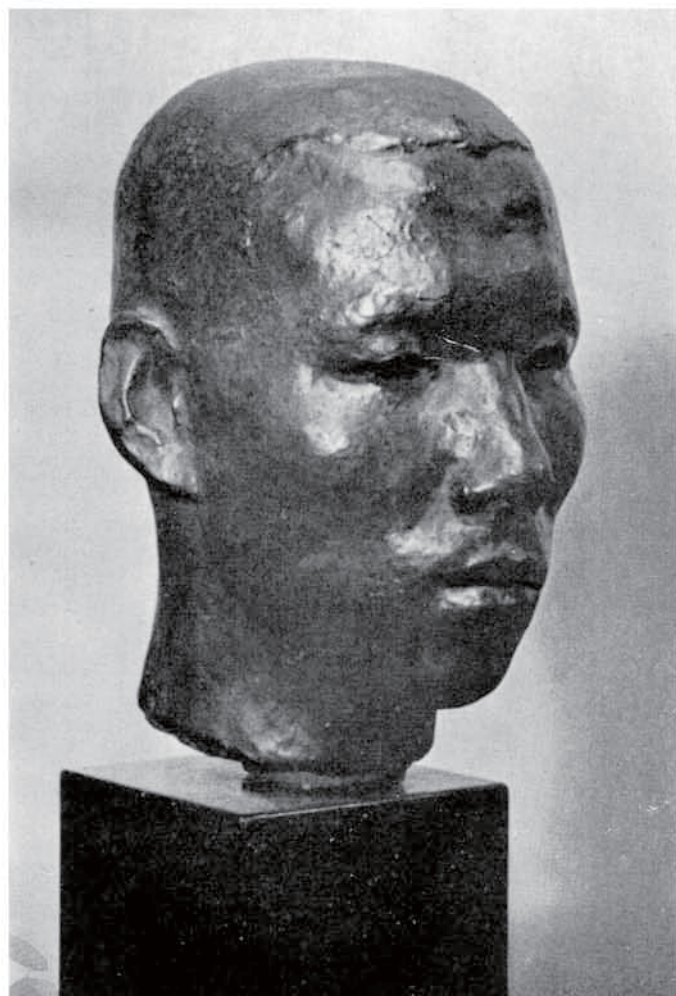
いつか静かなアトリエを和夢を抱きながらの製作です。







群 馬 の 人



「日本人の顔」

さきにこの「群馬の人」を作ってから、札幌の娘さんをモデルに「北国の娘」を作り、今年に入つて「木曾」という女の顔を作つた口の悪い仲間が、顔の地方めぐりか？などと私をからかうのだが、私には地方別に顔をならべてみようなどという博物館的意途があるわけではない。

ただ、このせまい日本の中で、いまだにその地域が生み出している特質が、比較的はつきりと残つていて、その中で新しい人間像が形成されつつあることに大変関心があるだけの話である。

これからも私はこんな気持の仕事をつづけたいと思つている。



齊藤廣胖

谷口玉次郎



風景



ゴヤの墓を訪ねる

月下旬マドリッドは一片の雲もなく毎日の晴天に明けくれて、如何にも南欧の感じがふかい。

市の中央にプラド美術館があつて、この国の生んだ巨匠ベラスケスが正面玄関に左右にグレコとゴヤの銅像が強い光と影を見せて静かに何物かを見つめている。

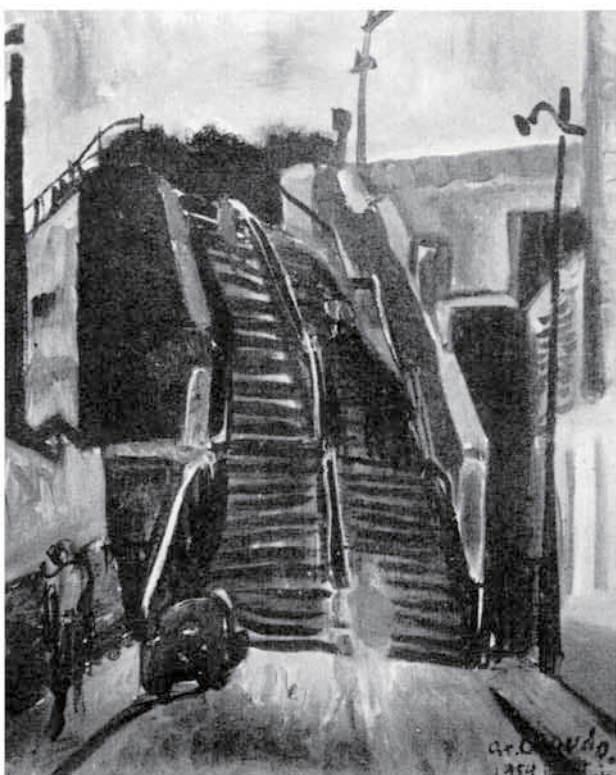
コクトウが且つてプラドウこそ世界の廻廊であると言つた様に、その内容といひスペイン派は勿論のこと、イタリアルネサンスの作品も豊富にこれの配列の見事な事は国立美術館として最大級の讃詞を与えられるものと思う。

先づベラスケスにうたれ、グレコを見てはトレドに走り、最後に不思議なバラエティーを持った作家ゴヤに釘づけにされる。一月半程のスペイン滞在ではあつたが、ゴヤこそはスペインらしい民族画家と言えると思う。

一日大使館の沼沢氏とゴヤの墓と壁画のあるサンアントニオデフロリダ寺を訪ねる。小さな寺でもあり目立たなく、余りおとづれるものもないらしく、正面入口は重くとざされていて横の小さな入口から中年の婦人が案内してくれる。ここにあるゴヤの壁画は僕の想像では、あの怪奇なケンランさは余りなく、心楽しく自分の居間に描き上げた様な淡い白黒を基調としたもので、しかもきびしいロマンチズムをたたえて限りなく美しい。中央にゴヤの墓が花束にかざられ静かにねむっている。

一冊の画集を買い、あとがみを引かれる思いの中に寺を出ると、午後の強い太陽がようやく暮れ沈む光をさして粉飾のないこの寺に好意ももてし、前庭の樹々が美しく見えた。

(等々力にて 五月)



サンクルー

サンアントニオデフロリダ寺院前で





新築のアトリエにて
三雲・小川夫妻

三雲祥之助



人々

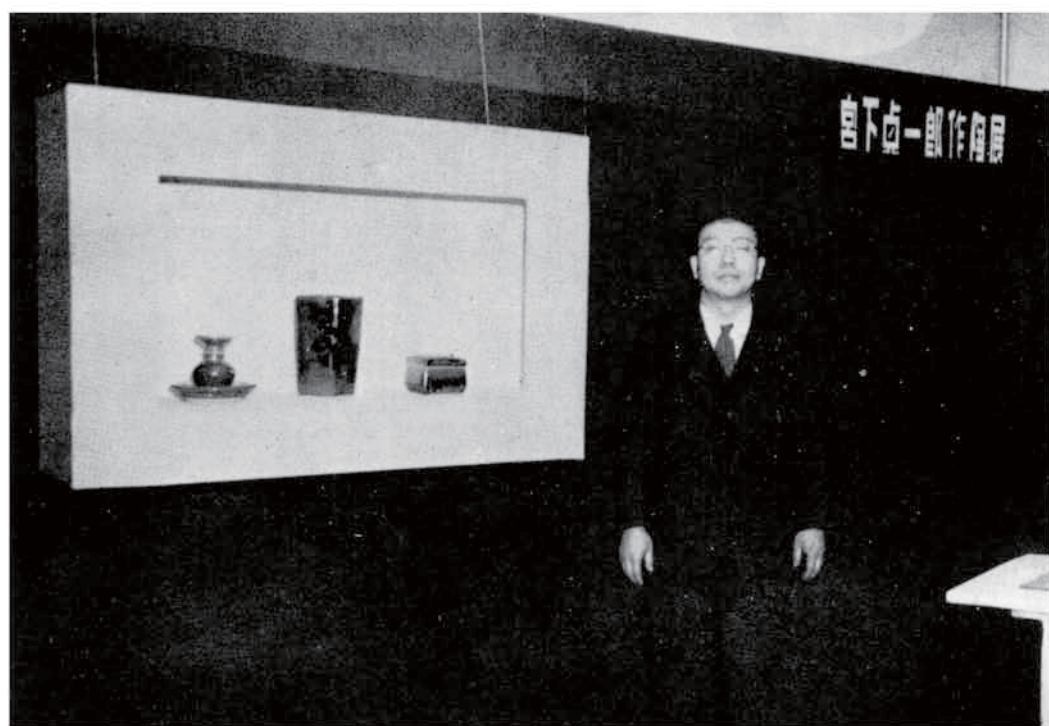
小川マリ



きかん



宮下貞一郎





汽 車

地方にいて絵を描いていると色々不便なことが多い。

第一、よい絵新しい絵を見る機会がない事。

第二、よい師、よい研究所に恵まれない事。

第三、制作への刺激が少ない事。

第四、新しい絵の理解者に乏しい事等々。

最初の問題は、地方にいる者にとって最も大きな決定的なナゲキだ。之を解決するには年に少なくとも一、二度は、東京に出かけ、美術館や展覧会で、ナマの絵をじかに見てくることだ。万難を排しても実行すべき事。

第二の事もなかなかだ。独りでコツコツ描いているのでは進歩が遅い。そこで同好会を作ったり、先輩の画室を叩いたりする。けれども一地方の特定の作家の影響を受けすぎる嫌いがある。だから時々、異質の作家を招いての実技講習や現代絵画論などをきくことが望ましくなる。

第三の事は、結局はたとえ、ヒトリになつても描きつづけることだ。制作への雰囲気やシゲキは、絶えず自分が求め自分が作り出していくより方法かないようだ。

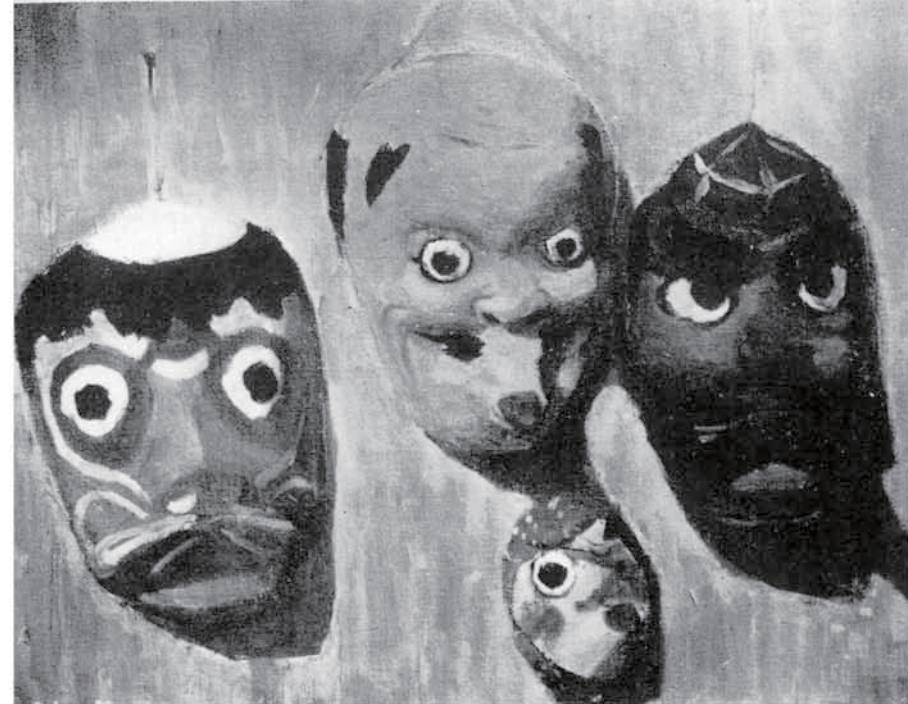
第四のことは、自分の絵の理解者がいないのはサビしい事だし、ましてその絵を売つて制作の助けとすることはムズかしい。だから自分の働いたお金で、絵に奉仕するというカクゴが必要だ。変に妥協などせず、本当に自由に誰にもこだわらず、個性豊かな新しい造形表現をしたいものである。と同時に、現代絵画を理解させる爲の積極的な方法も忘れず、作家もそれを享受する側も、共に前進していきたいものだ。



アカデミズム

日展の功罪はすべてに批判すみのことであるが、このたび北海道に到来したことはやはり一般的に言つて大慶のことであつた。ただ大衆の万事に於ける官尊民卑の思想に拍車をかけたことになつたとしたらその罪悪は大きい。今まで美術に於いて北海道に官展風が育ちにくかつたことはむしろ幸な事だつた。然るにもしもこの地の作家がこの日展をみてそこに真正のアカデミズムを発見したと解したならそれは少し誤つた考え方である。この展覧会はあくまでも一般の美術愛好家を対象としての美術鑑賞入門第一課と云つた意味に於いて有意義な行事であつた。賢明にして厳格な北海道作家なら冷静な批判精神でこの日展の作品を視抜いたことだろう。





僕がお嫁さんをもらつこら「君が結婚したのは、この俺が兵隊になつたよりも不思議なことだ」とマレー戦線から便りをよこした友人がいた。この友人は戦死してしまつたが君から絵をとつたらあとに何が残るか——と元気をつけてくれた。まもなく長女が生まれたら——三郎も父親になるんだなあ——と、こんどは父がしきりに感歎していたという。僕の絵になぞふりむこうともしなかつた父がある時、絵をみて「余興」がないとたつた一言いつてくれた。また、ある重役は、私が古典仏像の研究をしていることをはなすと「そいつは君の思いあがつた態度だ」といつた。これに対する僕の反論はない。ただ、振り返つてみる十年の歳月は紙よりも薄いと思うだけだ。



365日飽かぬ味

それはどこでも評判の

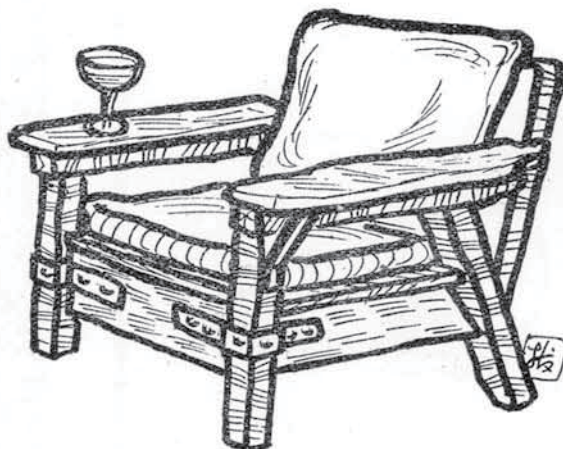
犬みそです.....



佐渡名産

マルダイみそ

おの寝み前
のマー杯ノ
をマ一杯ノ
夢を結ぶ



いつも甘美なブドウの香り!

ナンバーワン

No.1ポートワイン

旭川・八戸・東京
合同酒精株式会社

コ-セ-ソ-ト-ク-リ-ム

夏は爽快な
お飲みものを・・・



H

札幌・南3・西3
TEL ③ 2658

ミレット

室内装飾に
御贈答に
広告宣伝用に



洋画材料

野田ガクブチ店

狸小路2丁目 TEL ③ 2203

ガクブチは
当店へ



松 山
賞美堂

狸小路一丁目

祝 第十回全道展

ガクブチ
専門店

製造元より皆様へ

服部額縁店

札幌市北1条西10丁目

電話 ③-6029番